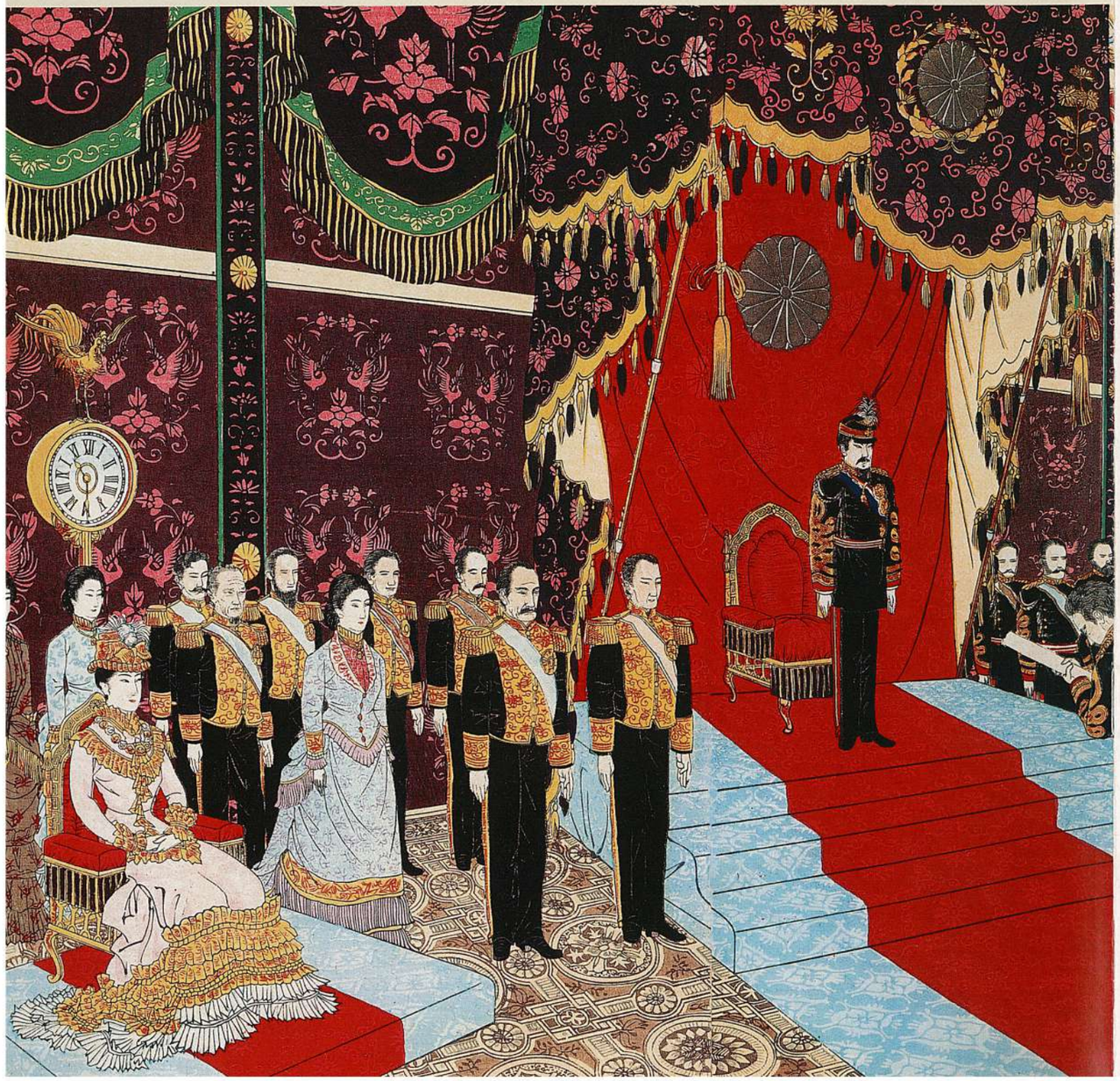
2004 Autumn

明治村だより

秋号 Vol. 37

目次

特別展「明治の女神（ミューズ） 昭憲皇太后」……2
竹中大工道具館　開館20周年記念巡回展
『木の匠と鉄の匠』 ……6
秋の明治村―催しものご案内 ……8
明治の機械 横形単気筒蒸気機関 ……10
明治の家具 足台付長椅子 ……10
A La Meiji-mura ……11



明治村 案内図

5丁目 51番地～67番地
- 51 聖ザビエル天主堂
- 52 金沢監獄正門
- 53 小那沙美島燈台
- 54 天龍眼鏡橋
- 55 隅田川新大橋
- 56 大明寺聖パウロ教会堂
- 57 川崎銀行本店
- 58 皇居正門石橋飾電燈
- 59 内閣文庫
- 60 東京駅警備巡査派出所
- 61 前橋監獄雑居房
- 62 金沢監獄中央看守所・監房
- 63 宮津裁判所法廷
- 64 菊の世酒蔵
- 65 高田小熊写真館
- 66 名鉄岩倉変電所(岩倉ホール)
- 67 帝国ホテル中央玄関(ポーツマス条約調印テーブル)

4丁目 34番地～50番地
- 34 第四高等学校武術道場「無声堂」
- 35 日本赤十字社中央病院病棟
- 36 歩兵第六聯隊兵舎
- 37 名古屋衛戍病院(愛知県有形文化財)
- 38 シアトル日系福音教会
- 39 ブラジル移民住宅
- 40 ハワイ移民集会所
- 41 六郷川鉄橋
- 42 尾西鉄道蒸気機関車1号
- 43 蒸気機関車12号・9号・三等客車
- 44 鉄道寮新橋工場(機械館) リング精紡機(重要文化財) 菊花御紋章付平削盤(重要文化財)
- 45 工部省品川硝子製造所
- 46 宇治山田郵便局(重要文化財)
- 47 本郷喜之床
- 48 小泉八雲避暑の家
- 49 呉服座(重要文化財)
- 50 半田東湯

3丁目 24番地～33番地
- 24 京都市電
- 25 北里研究所本館(医学館)
- 26 幸田露伴住宅「蝸牛庵」
- 27 西園寺公望別邸「坐漁荘」
- 28 茶室「亦楽庵」
- 29 品川燈台(重要文化財)
- 30 菅島燈台附属官舎(重要文化財)
- 31 長崎居留地二十五番館
- 32 神戸山手西洋人住居
- 33 宗教大学車寄

2丁目 14番地～23番地
- 14 千早赤阪小学校講堂
- 15 第四高等学校物理化学教室
- 16 東山梨郡役所(重要文化財)
- 17 清水医院
- 18 東松家住宅(重要文化財)
- 19 京都中井酒造
- 20 安田銀行会津支店
- 21 札幌電話交換局(重要文化財)
- 22 蒸気動車(鉄道記念物)
- 23 京都七條巡査派出所

1丁目 1番地～13番地
- 1 第八高等学校正門
- 2 大井牛肉店
- 3 三重県尋常師範学校・蔵持小学校
- 4 近衛局本部付属舎
- 5 赤坂離宮正門哨舎
- 6 聖ヨハネ教会堂(重要文化財)
- 7 学習院長官舎
- 8 西郷従道邸(重要文化財)
- 9 森鷗外・夏目漱石住宅
- 10 東京盲学校車寄
- 11 二重橋飾電燈
- 12 鉄道局新橋工場 明治天皇・昭憲皇太后御料車(鉄道記念物)
- 13 三重県庁舎(重要文化財)

★毎週土曜日は、小・中学生の入村料が無料になります。

お詫び 先号（夏号vol.36）の記述に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
2ページ上段3行目　誤・聖ザビエル主天堂→正・聖ザビエル天主堂
12ページ表紙　誤・楊州周辺→正・楊州周延

『明治村 だより』　第38号発行のお知らせ
発行時期　平成16年12月（予定）
申込方法　「明治村だより」第38号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料140円の切手とともに封書にてお申し込み下さい。

表紙　銀婚式祝典之図（部分）　安達吟光　明治27年

平成16年9月12日発行
「明治村だより」第37号（平成16年 秋）
発　行　博物館明治村
〒484-0000　愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314
◎ホームページ　http://www.meijimura.com
製　作　大日本印刷株式会社

特別展 明治の美神（ミューズ） 昭憲皇太后

九月十一日～十月十一日　三重県庁舎

昭憲皇太后

はじめに

昭憲皇太后――明治天皇妃　美子（はるこ）皇后――は、女子教育、福祉事業、製糸業はじめとする殖産興業、美術工芸の奨励など、多岐にわたってご活躍あそばされました。これは、日本の近代化に御心を注がれた明治天皇と揆を一にされたものでもありました。

今回の展示では、数多く開催された博覧会や美術展に行啓され、画家や工芸家の創作活動を奨励し、日本美術界の向上にお力を尽くされた昭憲皇太后の「美」に対する眼差しを、お身回りの品々からご紹介いたします。また本年は昭憲皇太后が崩御あそばされて九十年という記念すべき年であり、この年に展覧会を開催いたすことは大変意義深いことと存じます。

（以下、文中では昭憲皇太后については「皇后」と表記いたします。皇太后とは先代の天皇の配偶者をいい、本来ならば「昭憲皇后」と追号されるべきでありました。）

殖産興業の奨励

皇后は明治天皇とともに近代化、西洋化の推進者となり、そのお姿は数多くの錦絵に遺されています。明治四年に宮中に養蚕所を設置し（明治六年焼失）、明治六年に設置間もない官営富岡製糸場に英照皇太后とともに行啓され、さらに明治十二年に青山御所内に養蚕所を設けられ、その後今日に至るまで養蚕は皇后の仕事とされています。これは単に糸を紡ぐということにとどまらず、将来的には織布の国産化ということも視野に入れられたもので、皇后は明治二十年に「女子服制に関する思召書」を出され、女子の洋装を奨励し、特に国産服地の使用を勧奨されました。描かれた皇后像も明治二十年を境に、和装から洋装へと転換されているのは大きな特徴といえるといえます。

また天皇皇后両陛下は、近代化を推し進めるため、国内の産業を興すべく明治十年に東京上野公園で開催された内国勧業博覧会の開場式典にお二人でご臨席され、天皇は内務卿大久保利通はじめ大臣や地方官等を前にして「爰に内国勧業博覧会場の日に方り　朕親ら臨み開場の典を行ふ　朕惟ふに会場の整備せる列品の良好なるや以て知識の日に開明に赴き　工芸の月に精巧に進むを徴すへし　而して有司勧奨の効も亦しょうなりとせす朕深く之を悦ふ　朕更に望む人民の益々奮励し産業の益々繁盛し我全国をして永く殷富の幸福を享けしめんことを」とお言葉を述べられ、同席された皇后も思いを同じくされていたことと推測されます。その後、五回まで開催された内国勧業博覧会には皇后もすべて足をお運びになり、実演を行っている工人にお声を掛けられたり、時にはお買い上げになられるなどされました。

皇后宮様蚕製糸場御遊覧之図　年代不詳
歌川房種画

富岡製糸場行啓
昭和2年　荒井寛方画
明治神宮聖徳記念絵画館
写真提供

大日本内国勧業博覧会開場式之図　明治10年　橋本周延画

お身回りの品々の文様『藤と小葵デザイン』

皇后のご生家、一條家の家紋は「下がり藤」です。皇后についての記述に、「お輿入れの際のお道具はすべて藤の家紋が施されていた」という記述もありますが、身の回りのものすべてに華麗に施された藤の蒔絵はその後の美子皇后の美意識の形成にも大きな影響を与えたと思われます。現在遺されている御物の中にも家紋の藤を描いたものだけでなく、藤をデザイン化したものは多く残され、博物館明治村でも明治宮殿で昭憲皇太后遺愛品として伝えられてきた小椅子や五号御料車の装飾などにみることができます。

また、小葵は後述するように限られた身分の方しか用いることができない文様です。これは皇后に特徴的な文様ではありませんが、皇后の遺愛品の中には小葵が描かれたものが多く、単に伝統的なものに用いるだけでなく、洋家具にまで巧みにそのデザインは取り入れられています。

折畳み椅子（部分）小葵文

小椅子（部分）藤文

小葵の文様はその他天皇皇后のお身回りの品々にも多く用いられる高貴な文様の一つで、明治十七年九月十七日に制定された服制においても、高位の婦人の礼服にしか用いられないよう、左記のように定められていました。

婦人服制

礼服

一袿　冬地唐織　色目地紋勝手

夏地紗一重織　色目地紋勝手

（中略）

一袿地紋並色目ノ内左記ノモノハ用ユヘカラス地紋

（共縫）（雲鶴）（小葵）

（雲立涌二向鸚鵡）雲立涌二外ノ模様ハ差支ナシ

（鳳凰模様ノ内　目ノ長キ方）（後略）

主な展示品

小袿　葡萄色地小葵向鸚鵡丸文唐綺　個人蔵

明治二十年の洋装奨励の思召書が出されるまでは、小袿は最もフォーマルな服装とされ、宮中賢所へご親拝の際にお召しになられたものです。小葵の地紋に皇室の女性が身に付ける文様で最も高貴とされる向鸚鵡が織り出されています。

釵子　個人蔵

明治二十二年二月十一日の大日本帝国憲法発布式典の際に皇后がご着用になられたもの。釵子はもともと十二単ご着用の際に用いられる髪飾りでしたが、洋装にも似合うよう皇后ご自身がご考案されたものです。この釵子は日本赤十字社設立にあたって、社長佐野常民が社紋を定める際、皇后にご相談申し上げると、この釵子の文様を用いるようご助言賜ったとの逸話が残っています。

憲法発布式之図　明治22年　井上探景画

日本赤十字社中央病院病棟に展示されている日本赤十字社社紋の額

大礼服　昭憲皇太后ご着用　共立女子学園コレクション

大礼服は新年朝拝、元始祭、新年宴会、伊勢両宮例祭、神武天皇即位日、神武天皇例祭、孝明天皇例祭、天長節、外国公使参朝の際などに着用される最も格式の高い服装です。男性はいち早く洋装化が推し進められ、明治五年から着用されましたが、女性は少し遅れて前述の明治十七年の服制で基本的には和装で洋装については「西洋服装の儀は其時々達すへし」と記されています。

初期の皇后の洋服はパリの店へ注文されていましたが、明治三十年代には宮中裁縫所ができ、国内で日本人によって本格的な洋服が製作されるようになりました。デザインはパリから取り寄せたスタイルブックから選び、その中から選定されたデザインを宮中裁縫所で仕立てるという方法が取られました。

洋服の製作は外国の縫製方法とは異なり、上衣・下衣・下重ね（下着）はそれぞれ異なる裁縫師があたるという日本独特の精神観に基づいていました。したがって一見するとワンピースにみえるものも実は上下の分かれたツーピーススタイルでした。用いられる服地なども当初はすべて外国産のものでしたが、美子皇后が御奨励された養蚕・製糸の成果としての国産絹織物が次第に用いられるようになってきました。

今回展示いたします大礼服は元旦の朝拝参賀に宮中三殿の一つである豊明殿でお召しになられたもので、明治三十九年に製作されたといわれているものです。

ボディス（上衣）・スカートからなるデコルテ、トレーン、下着類からなっています。デコルテ（decollete）は「衿をくった」という語源から想像されるように、一般的に胸や肩、背中を大きく開けたものですが、皇后の御洋服はすべて一見すると大きく胸元を開けたように見受けられますが、実際は柔らかな薄地の布で覆い隠しているのが大きな特徴となっています。

萌黄色のビロード地に菊花の刺繍を施したこの大礼服の製作者は日本洋装界のパイオニアの一人、大島万吉、刺繍は池田祐三郎といわれています。服地はレースとビーズ刺繍の部分を除いては国産のものが用いられたと考えられています。トレーンの長さは三メートル三〇センチで、肩から裾にいくにしたがって、小輪、中輪、大輪などと種類の異なる菊を日本刺繍で華麗に表しています。

おわりに

現代において美子皇后―昭憲皇太后の足跡について語られることは残念ながら多くありません。しかし、この展示をご覧いただき、先例も少ない中、斯くも精力的に、果敢に日本の近代化を多くの側面から推し進めたその存在は、女性としてのみならず、現代に生きる私たちに一つの道筋を示して下さっているような気がしてなりません。

特別展「明治の美神（ミューズ） 昭憲皇太后」出品目録

	資料	名作者	年	所蔵
1	御化粧道具　藤蒔絵			明治神宮
2	御鏡立　藤蒔絵			明治神宮
3	御鏡　藤蒔絵			明治神宮
4	御櫛台　藤蒔絵			明治神宮
5	御小椅子　藤蒔絵			博物館明治村
6	御火鉢　小葵蒔絵			明治神宮
7	御文匣　唐花尾長鳥丸蒔絵			明治神宮
8	御硯箱　小葵唐花尾長丸蒔絵 石盤付			明治神宮
9	御広蓋　小葵菊鶴蒔絵			明治神宮
10	御手あぶり　小葵菊蒔絵			明治神宮
11	御釵子		明治22年	個人
12	御小袿 葡萄（えび）色地小葵向鸚鵡（おうむ）丸文唐綺（からあや）			個人
13	御香合　菊文			明治神宮
14	大礼服		明治39年	共立女子学園コレクション
15	御椅子　小葵文			博物館明治村
16	宮中養蚕之図	長谷川竹葉	明治14年	博物館明治村
17	富岡製糸場行啓　※パネル展示	荒井寛方	昭和8年	明治神宮聖徳記念絵画館
18	皇后宮様蚕製糸場御遊覧之図	歌川房種	年代不詳	博物館明治村
19	女子師範学校行啓　※パネル展示	矢沢弦月	昭和9年	明治神宮聖徳記念絵画館
20	明治小史年間紀事 皇后宮西 京行啓鉄道館発車之圖	月岡芳年	明治9年	博物館明治村
21	皇后宮還幸　宮御渡海の図	橋本周延	明治10年	博物館明治村
22	大日本内国勧業博覧会開場式之図	橋本周延	明治10年	博物館明治村
23	横須賀行幸之図	井上探景	明治22年	博物館明治村
24	東京慈恵医院行啓　※パネル展示	満谷国四郎	昭和2年	明治神宮聖徳記念絵画館
25	憲法発布宮城二重橋御出門之図	橋本周延	明治22年	博物館明治村
26	帝国萬歳憲法発布畧図	橋本周延	明治22年	博物館明治村
27	新皇居於テ正殿憲法発布式之図	安達吟光	明治22年	博物館明治村
28	憲法発布式之図	井上探景	明治22年	博物館明治村
29	大日本帝国銀婚御式	南斎年忠	明治27年	博物館明治村
30	額画　銀婚御式の図	竹内小国政	明治27年	博物館明治村
31	五五大典銀婚式御式之図	竹内小国政	明治27年	博物館明治村
32	銀婚式祝典之図	安達吟光	明治27年	博物館明治村
33	天皇陛下銀婚式奉祝箏曲歌			博物館明治村
34	野戦病院エ行啓之図	小林清親	明治27年	博物館明治村
35	赤十字総会行啓　※パネル展示	湯浅一郎	昭和 4年	明治神宮聖徳記念絵画館
36	坤徳	清藤正輔	明治35年	博物館明治村
37	昭憲皇太后御肖像	和田英作	明治44年	博物館明治村
38	風俗画報　第421号 皇后陛下　伊勢行啓図会		明治44年	博物館明治村

※展示品は変更される場合があります。

昭憲皇太后略歴

年号	西暦	事　績
嘉永 3	1850	ご誕生。御名富貴姫（ふきひめ）、後寿栄姫（すえひめ）勝子（まさこ）
文久 3	1863	父、一条忠香（ただか）薨（こうそ）去
慶応 3	1867	睦仁（むつひと）親王（しんのう）践祚（せんそ） 女御（にょうご）にご決定
明治元	1868	天皇即位式 御名を美子（はるこ）と賜る ご入内（じゅだい）
明治 2	1869	京都をご発輿（はつよ）
明治 4	1871	宮中大奥改革 吹上御苑に養蚕所を設置
明治 6	1873	皇居炎上、以後赤坂離宮を仮御所とする 英照（えいしょう）皇太后とともに群馬県富岡に行啓、製糸場御覧
明治 8	1875	東京女子師範学校開校式行啓
明治 9	1876	京都行啓
明治10	1877	明治天皇とともに内国勧業博覧会行幸啓 学習院開業式行幸啓 紙幣局製造場へ行啓
明治11	1878	天皇の北陸・東海ご巡幸にあたり板橋駅にお見送り
明治12	1879	明宮嘉仁（はるのみやよしひと）親王（しんのう）（大正天皇）ご誕生 横浜に行啓、新造の軍艦「扶桑・金剛・比叡」など御巡覧
明治17	1884	工部省品川硝子製造所（現 博物館明治村）へ行啓
明治18	1885	華族女学校開校式に行啓 鹿鳴館に行啓
明治19	1886	相模長浦へ行啓、軍艦「浪速・高千穂」ご試乗 博愛社（後の日本赤十字社）病院へ行啓
明治20	1887	初めて、洋装大礼服で新年拝賀に臨まれる 女子服制に関し、思召書を賜る 京都行幸啓、東京慈恵医院開院式行啓 佐野常民日赤社長に鳳凰の釵子のデザインを日赤社紋とするよう思召される
明治22	1889	赤坂仮御所より新皇居へ移御 憲法発布式、観兵式行幸啓 上目黒の西郷従道別邸（現 博物館明治村）へ行啓
明治25	1892	日本赤十字社中央病院（現 博物館明治村）開院式に行啓、各病室を巡覧される
明治27	1894	大婚25周年祝典
明治28	1895	広島陸軍予備病院・呉鎮守府病院に行啓 第四回内国勧業博覧会（京都）行啓
明治33	1900	皇太子嘉仁親王、九条節子姫とご成婚
明治34	1901	迪宮裕仁（みちのみやひろひと）親王（しんのう）（昭和天皇）ご誕生
明治35	1902	日本赤十字社第11回総会及び25年記念祝典行啓 初の皇后用御料車「5号御料車」（現 博物館明治村）完成
明治36	1903	第五回内国勧業博覧会（大阪）行啓
明治44	1911	伊勢神宮ご参拝
明治45	1912	明治天皇天皇崩御
大正 3	1914	美子皇后崩御　諡（おくりな）、昭憲皇太后

財団法人竹中大工道具館　開館20周年記念巡回展　『木の匠と鉄の匠』　博物館明治村会場

期間：平成16年10月19日（火）～11月28日（日）　会場：三重県庁舎（1丁目13番地）

明治村トリエンナーレ'04
芸能・芸術祭

11月30日まで開催中

呉服座公演　開催中

吉本興業による芝居「吉本純情笑学校」

吉本の芸人たちが、明治村にある建物の住人に扮し、明治を舞台に繰り広げる笑いと涙の人情ドラマです。

会　場	呉服座（4丁目49番地）
演　目	「泣いてたまるか次郎之丞」
観劇料	お1人様500円（小学生以上）
公演時間	11:30～、12:30～、13:30～、14:30～、15:30～ 10月30日は11：30、10月31日は15：30のみ。11月は14：30までの4回

芸能・芸術祭　参加者募集

村内の歴史的建造物を会場として、プロ・アマ問わず様々なジャンルの芸能・芸術を発表してみませんか。

●開催期間
11月30日までの明治村トリエンナーレ'04「第1回　芸能・芸術祭」開催期間中

●応募資格
年齢、プロ・アマ問いませんが、内容が明治村の雰囲気を損なわないものであることが原則です。

●応募方法
芸能・芸術祭参加希望の旨と、ご住所、お名前、お電話番号、予定している内容をお知らせ下さい。募集要項と申込用紙を郵送させて頂きます。

●〆切り
公演等希望日の1ヶ月前

詳しい内容、申込みは明治村のホームページ（meijimura.com）でも受付けております。　☎ 0568-67-0314

常設展示のご案内

明治のくらし よろず体験

〈1丁目13番地 三重県庁舎 2階〉

明治村所蔵の明治時代から大正時代にかけての暮らしの道具を展示しています。桶かつぎ、昔の遊び体験、ろうそく・ランプの明るさ体験など明治の暮らしを体で感じて、楽しんで下さい。

明治の時計

〈1丁目13番地 三重県庁舎 2階〉

明治時代の懐中時計、ぼんぼん時計など数多くの時計が展示され、今でも時を刻んでいます。時計が描かれた錦絵・暦も展示してあります。

明治の椅子

〈1丁目13番地 三重県庁舎 1階〉

赤坂離宮建設時（明治42年）にフランスから輸入された椅子をはじめ、鹿鳴館・明治宮殿等で使用された明治時代の椅子が展示されています。

トイレの館

〈3丁目30番地 菅島燈台付属官舎〉

明治・大正期には染付（白地に青い模様）や青磁（薄い緑色）など美しい色や図柄の便器が作られていました。ここでは明治時代に使用されていたバラエティーに富んだ便器が展示されています。

ガラス絵ギャラリー

〈4丁目45番地 工部省品川硝子製造所　2階ギャラリー〉

長く新制作協会や日本ガラス絵協会で精力的に活動されてきた、加藤金一郎氏の心暖まるガラス絵が展示されています。

明治村見学をもっと楽しくする

建物内部ガイド

普段入れない建物の内部をガイド付きで特別公開いたします。
（所要時間　各約15分）

【西郷従道邸・東松家住宅・西園寺公望別邸「坐漁荘」】

時間（各所とも）	
11：00	11：20
11：40	13：00
13：20	13：40
14：00	14：20

【呉服座】

時間	
11：00	12：00
13：00	14：00
15：00	

プレミアムガイドツアー（要予約）

明治の貴重な建造物など文化財を、案内付きの電動車で巡る予約制のガイドツアーです。見学コースはお客様のご希望に合わせ設定いたします。所要時間は1時間30分。料金は4名様まで10,000円、5名様12,000円、6名様14,000円です。（入村料別）

予約　☎(0568)67−0314

※催事は都合により変更する場合がありますので、詳細については事前にお問合せ下さい。

★秋の催し物ご案内★

重要文化財【品川燈台】特別公開

10月30日・31日

11月1日の灯台記念日にちなんで品川燈台（3丁目29番地）を特別公開いたします。
品川燈台は東京都港区品川沖の第二台場の西端に建てられ、明治3年（1870）に点燈されました。現在わが国最古の洋式燈台として重要文化財に指定されています。内部の螺旋階段を上がっていただき、デッキから入鹿池が広がるすばらしい光景をお楽しみください。

明治村ウエディングフェア　お問い合わせは ☎ 0120-78-2205

11月21日【帝国ホテル中央玄関・聖ザビエル天主堂・岩倉ホール】

模擬結婚式　11：00～・13：00～・15：00～
披露宴セットや引出物の紹介もしております。（見学無料）

鉄道の日記念　蒸気機関車　機関士体験

10月16・17日

明治時代に実際に走っていた蒸気機関車の運転台に乗って、機関士体験ができます。（参加料400円、身長が130cm以上の小学校3～6年生）※事前予約制です。電話か明治村HPからご予約ください。

明治村写真コンテスト　入賞作品展

9月11日～30日【東山梨郡役所】

明治村写真コンテスト「明治村百景」の入賞作品を展示します。
四季折々の明治村の写真をお楽しみください。

越中八尾のおわら踊り

毎年9月に富山県八尾町で行われる「おわら風の盆」が今年も明治村で再演されます。
幻想的な胡弓の調べと叙情的な踊りをお楽しみください。

10月30日（土）

街流し	13：30～14：00〈帝国ホテル前周辺〉（無料）
公演	14：30～15：00〈呉服座〉（有料・全席指定）
輪踊り	15：10～15：30〈呉服座前〉（無料）

10月31日（日）

街流し	11：00～11：30〈帝国ホテル前周辺〉
公演	12：30～13：00〈呉服座〉（有料・全席指定）
	13：30～14：00〈呉服座〉（有料・全席指定）
輪踊り	14：10～14：30〈呉服座前〉（無料）

＊呉服座公演の鑑賞券（700円）は、名鉄主要駅および駅旅行センター、チケットぴあにて9月15日から発売。

明治村の新たなモニュメント『新世界への扉』

正門の正面にモニュメント『新世界への扉』が完成しました。使ってあるものは、内閣文庫（5丁目59番地）正面三角壁の飾り（メダリオン）と金沢監獄正門（5丁目52番地）の門扉です。内閣文庫は移築以前はレンガ造の建物でしたが、復原に当たり主構造を鉄筋コンクリートに置き換えました。そのため昔の壁から削り取ることが出来ずに、壁ごと運んだ正面モルタル彫刻（左官職の鏝絵と同じ）は、復原の参考品として使うために残してあったものです。今回、雨などに対する防護処置を加えて披露することにいたしました。金沢監獄正門の大扉は、門が村内の主要道路にある関係で使われずに大切に保管してあったものです。前面には小さな池を作りました。周壁の笠石は「汐留のレンガ」、壁面は帝国ホテルの「スクラッチタイル」、池底のタイルにはINAXの実験工房の協力を頂いて美しいタイルを使いました。

鉄扉には次のような言葉が掲げられています。開村当初からの関係者であった文学者野田宇太郎先生の言葉「あなたを、明治村は心から歓迎します。」です。明治時代は、日本が世界に門戸を開いた時でした。歴史はこれから進むべき新しい世界を探す手掛かりとして見る手本です。そのような考えを踏まえ、且つ野田先生の言葉に呼応してこのモニュメントを『新世界への扉』と名付けました。記念の場所として、皆様に使っていただきたいと思っています。

各種ガイドのご紹介

ボランティアガイド

青い腕章をつけたボランティアが、ボランティアブースと京都七條巡査派出所を拠点として、各丁目の建物をガイドいたします。

● 幸田家訪問　【幸田露伴住宅「蝸牛庵」】
幸田家の人々の生活ぶりをご案内します。

● 展示機械ガイド　【鉄道寮新橋工場（機械館）】
11:30～・14:00～　（所要時間　約30分）
蒸気ハンマーの実演や展示機械の解説を行っています。

● 予約制ガイドツアー（要予約）
団体のお客様を対象にした予約制のツアーです。ボランティアガイドとともに明治村の貴重な建造物をもう一歩踏み込んで見学してみませんか。所要時間は1時間～1時間30分。モデルコースもいろいろ取り揃えています。

明治村のホームページからも予約ができます。（www.meijimura.com）

内閣文庫（5丁目59番地）

金沢監獄正門（5丁目52番地）

予告!!
明治村 子ども かがやきプラン

10月第2土曜より毎週土曜日開催予定

小中学生向けの各種催しを計画しています。
たとえば…
・ガイドツアー「明治村　楽しくまわり隊」
・折り紙建築教室「明治建築　つくり隊」
・昔のあそび体験「明治 de もっとあそび隊」
など、小中学生の皆さんが楽しく明治村を見学し、体験・発見していただける場となるよう様々なプランを用意。
詳しい内容については、明治村のホームページでお知らせいたします。
（毎週土曜日は、小・中学生の入村料が無料です。）

横形単気筒蒸気機関

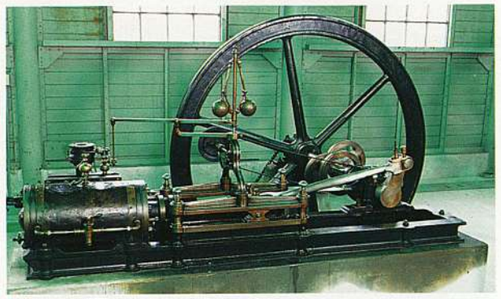
この蒸気機関は、明治五年（一八七二）の官営富岡製糸場の開業時にフランス人のお雇外国人ブリューナによって輸入されたもので、繭から生糸を挽く繰糸機の原動機として使われていました。

富岡製糸場は、日本の生糸の品質の向上を図る目的で明治政府によってつくられ、ヨーロッパの近代的な機械製糸を採用し、三百釜の新式の繰糸機をはじめすべての機械類を輸入によってまかない、その最新鋭の施設設備に当時の人々は目を見張ったといわれています。富岡製糸場はその後、明治二十六年（一八九三）九月に払い下げられ、昭和十三年（一九三八）七月に現在の片倉工業の工場となり、今日に至っています。

この蒸気機関はもともとは操糸工場に隣接する「汽罐・汽機室」に据付けられ、動力はシャフトを通して操糸工場内の繰糸機に伝達されて、大正九年（一九二〇）に電動機に置き換えられるまでの約五十年間使用されたといわれています。戦後取り外され、博物館明治村に保存されるまで西繭倉庫に保管されていました。

この蒸気機関にはシリンダの横の蒸気分配装置にマイヤー式二重弁が取り付けられており、単弁式に比べ、エネルギーロスを少なくすることができるのが大きな特徴の一つです。

製造された場所ははっきりわかりませんが、日本で最初の官営製糸場で使われ、日本の近代化に大きく貢献した由緒ある蒸気機関だといえます。



シリンダ径 250mm、ストローク 500mm
出力17.5HP（13.1kW）、回転速度 55rpm

明治の家具

足台付長椅子

三重県庁舎（1丁目13番地）の一階には多くの明治の椅子が展示されています。

その中の一つに足台付長椅子があります。これは赤坂離宮の球戯室、現在でいうビリヤード室に置かれておりました。イギリスの紳士たちは食事後の娯楽としてビリヤードを楽しむことを習慣としており、明治後半から大正初めには、それに習って洋館、迎賓館に頻繁に作られるようになりました。赤坂離宮の内装は部屋ごとにフランス・ルネッサンスをはじめ、18世紀末～19世紀初頭の各種様式を用いて彩り、家具は直接現地で買い求めたフランス、もしくはドイツのものが使われておりました。

この足台付長椅子は18世紀末、フランスの「ルイ16世様式」のものです。有名な皇后マリー・アントワネットはこのルイ16世の后です。フランスではルイ13世の晩年以来財政が窮迫しており、さらにマリー・アントワネットの豪奢な生活は民衆の反感を買い、フランス革命によって二人は処刑されてしまいました。マリー・アントワネットは贅沢を好んだようなエピソードが多いのですが、実際は儀式張った貴族趣味を好まず、静的で庶民的な生活を望んでおり、さらに美術にも優れた才能を持っていたようです。マリー・アントワネットの好みによって生まれた「ルイ16世様式」はこれ以前のロココの装飾過多と流曲スタイルの「ルイ15世様式」を母体として昔の古典様式（垂直形、直線的）が使われております。こういった豪華な西洋家具はその時代の背景や権力者の趣味に大きく左右され、作り出されてきたのです。

このように足付長椅子は、直線で構成された全体の形、下にいくにしたがって細くなる六本の足等、ルイ16世様式の特徴をよく表しています。また、椅子の張り地は他の部屋で使用されているものとは多少雰囲気が違い、フランスのリール地方で織られたものが使われております。赤色の花模様の張り地はシンプルな椅子全体の形に華やかさを加えています。あまり他に例をみない足台は実は前へスライドするようになっており、おそらく当時はこの椅子に腰掛け、ビリヤードを観戦したりくつろいだりしていたのでしょう。

憧れの階段教室

明治村2丁目のレンガ通り15番地に建つ**第四高等学校物理化学教室**。この建物は明治二十三年（一八九〇）に金沢の第四高等中学校の文理化学実験教室場として建てられ、後に金沢大学へと引き継がれたものです。

明治政府にとって西洋科学知識の国民への教育は重要な問題でした。小学校の教育科目に四科目の理科が入っており、中学・高等では実験まで含めた理科の授業が特別教室と呼ばれた建物で行われました。木造桟瓦葺平家建ての中央部分、一回り大きくなっている所が階段教室です。席を階段状に配置したのは、教師の実験を生徒が容易に見学できるように工夫された結果で当時のモダンな教室設計の一例です。この建物の設計者である文部省技師の山口半六、久留正道は明治二十八年に文部省が発行した「学校建築図説明及設計大要」の著者であり、その中の物理化学教室についての天井の高さ、採光、換気の記述※をみると、この第四高等学校の形式が設計基準として示されているのがわかります。

教室内には大きな実験台がありその後ろには上下する二枚の黒板があります。そして注目すべきは黒板の内部にある化学実験用のドラフトチャンバーです。ドラフトチャンバーとは各種の薬品や用材を取扱う実験や作業で発生する有毒ガスや悪臭ガスを排除する設備で、当時の写真を見ますと黒板の後ろには引き違いのガラス戸が取り付けられており、その上部は給排のための穴があけられ煙突に繋がっています。明治二十二年に山口・久留コンビで建設された第五高等中学校（熊本県・重要文化財）の化学実験場にはドラフトチャンバーはみられず、これは現存する貴重な古いドラフトチャンバーの一つです。その頃の生徒達は階段状の机から身を乗り出して教授が行う実験に見入っていたことでしょう。

※「成ルヘク平家建トシ階段席ヲ設クル場合ニハ最高位置ニアル生徒ノ頭上ヨリ天井迄五尺以上ノ高トシ又教授台ノ机ニハ日光ノ注射ヲ充分ニシ室内各窓ニハ暗幕ヲ設ケ其他瓦斯抜及臭気抜等ノ設ケアルヘシ」

木造建築におけるコーナーストーン

明治七年、二十九歳の若き県令が山梨県で誕生しました。彼の名は藤村紫朗。藤村は公共建築の洋風化を強力に推し進め、その在任中に造られた建造物は百を越えたといわれています。そのうちの一つが明治村に移築されている**東山梨郡役所**（2丁目16番地）です。この建物を正面に見るとき、白い漆喰に映える隅部の黒い模様が目を引きます。同じく藤村の在任中に建てられた睦沢学校（現甲府市藤村記念館）においても、白い壁面のコーナーは、漆喰を盛り上げて黒く仕上げることで人目を惹く意匠となっています。

コーナーストーンは、元来組積造建築の隅部を補強する目的で、壁面の他の部分より堅固に石を積み上げたものです。レンガ造の場合は建物の隅部に石を配し、石造の場合は隅だけにより大きい石を積むので、結果として壁面からやや出っ張ったり、石の目地がそこだけ異なったりします。つまり建物全体の中で、コーナーストーンの部分が際立って見えることになるのです。木造建築においては、コーナーストーンは構造的意味を持ちません。しかし西洋建築を初めて目にする明治初期の大工棟梁たちにとって、隅部が強調されたようなコーナーストーンは意匠上特に重要に思われたのでしょう、彼らは漆喰を盛り上げて色を変えたり、厚板でその形をかたどったりして、コーナーストーンを意匠として取り入れました。

地元の職人たちによって造られたこの東山梨郡役所も例に漏れず、建物の出隅部分は漆喰を盛り上げたコーナーストーン状の装飾によって強調されています。切り石の長手方向と小口方向を交互に積み上げたように見せるこの手法は、明治初期の洋風建築によく見られます。西洋の組積造建築の構造的特色であるコーナーストーンは、日本における明治初期の洋風木造建築では視覚的効果を高めるものとして定着したのでした。

石の装い

レンガ通りにさしかかると、石の意匠に包まれたどっしりとした建物があります。明治三十一年（一八九八）に北海道札幌市大通りに建てられた**札幌電話交換局**（2丁目21番地）です。

電話が日本で初めて使われたのは明治十年で、明治二十三年に東京―横浜間に市外の電話交換が開始され、明治二十二年に東京―大阪間の長距離市外電話が完成しました。その頃、北海道は新天地開拓の意味もあって、比較的早い時期に電話が引かれました。当時、札幌は火災の多い町であり、火除のために幅の広い通りが計画されたように、こうした情報の要として重要である電話局舎を耐火にすぐれた石造で築きました。

外壁は札幌郊外の定山渓で採掘した「札幌軟石」が用いられ、建物の一階から二階にかけての胴蛇腹にはアカンサス※のロゼット花（小さなバラ）に由来し、開花した花を真上から見たように、円の中心から放射状に花弁を配した文様をいいます。花弁の葉の数は三、四、五、六、八、十、十二、十六で表されるのが一般的で、古代においてはエジプト、アッシリア、ギリシア、ローマの建築や陶器に装飾され、初期キリスト教時代の石棺には十字と共に彫刻されました。また、花弁を広げた形から想像出来るように、太陽の象徴とも関連があるといわれています。このロゼットのような植物文様が使われたのは、おそらく人間の生活に最も身近なものであったと同時に、植物が四季で織り成す生命のドラマがあったからに違いありません。そして、人間が憧憬と祈りをこめて、植物の生命の展開に潜む活力を建物自体にも宿らせた証なのではないでしょうか。その小気味良く連続する文様からは、活気と動きが生まれるように感じられます。また視覚的なリズムによって、単調になりがちな外観をより豊かに印象深いものにしています。

この札幌電話交換局が郵便局を経てその役目を終えた折、危うく養豚場に払い下げられるところを明治村の移築建造物第一号として安住の地を見出すことができたのは、その堂々たる姿所謂なのかもしれません。

※ Acanthus。地中海地域、西アジア原産の葉アザミ。